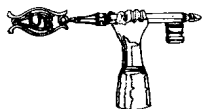


原点が存在する 谷川 雁



原点が存在する 谷川 雁



潮出版社

原点が存在する

昭和 51 年 6 月 15 日 初 版
昭和 52 年 9 月 25 日 二 刷

著 者 谷 川 雁
発行者 島 津 矩 久

東京都千代田区飯田橋3の1の3
発行所 株式会社 潮 出 版 社
電話(230)0781(編集) 振替東京5-61090
(230)0741(販売) 〒 102

印刷 第一印刷株式会社 製本 鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替いたします。

© G. Tanikawa 1976 Printed in Japan.

原点が存在する・目次

I

原点が存在する 9

層ということ 16

深淵もまた成長しなければならぬ——詩人から詩人へ 18

組織とエネルギー 25

民衆の無党派的エネルギー 28

幻影の革命政府について 32

無を噛みくだく融合へ——現代詩が目ざしているもの 42

工作者の死体に萌えるもの 53

ペンでうらみを晴らす道 57

さらに深く集団の意味を 62

II

東洋の村の入口で 77

「農民」が欠けている 82

現代詩における近代主義と農民 88

農村と詩 104

農村の中の近代 125

自分のなかの他人へ 130

III

詩と政治の関係 137

党員詩人の戦争責任 161

辺境の眼は疑う——革命的ロマンティズムの展開を願って 165

現代詩の歴史的自覚 170

毛沢東の詩と中国革命 183

IV

昭和一八年秋の音楽 197

森崎和江への手紙 200

死後轢断 206

モデル村 208

東京の進歩的文化人 211

サイズのあわせかた 224

V

アラゴンについて 229

欠席した人々へ——ランボオについて 232

現代詩時評 236

流浪のための定着——ルネ・ギイ・カドウ／根岸良一訳「非メタフィジック詩論」 249

「貞節」のたぬきわな——山代巴「荷車の歌」 251

兵士の恐怖は怪物にならぬ——壺井繁治詩集「影の国」「頭の中の兵士」、井上光晴詩集「すばらしき

人間群」 254

ある博物誌の一節——山内竜詩集「暗室」 256

あじあ人の従弟として——バプロ・ネルダー「大いなる歌」 260

一日おくれの正確な時計——野間宏「暗い絵」

263

現代詩鑑賞——才所三正「寂寥」

268

機関庫から詩集までのちいさいスリッパ

272

わが代表作

275

あとがき

280

装幀・司 修

I

原点が存在する

まるでワグナア歌劇の装置を思わせた。みすばらしい寝衣にふくれて、私は谷の横倒しにされた栗の木に腰をおろしていた。銀河ほどの幅に空をのこしたまま兩岸に茂りあう樹木と渴ききった砂がつくりだす洞窟——気流は封をきった手紙の読みおえた一枚一枚を下手にとばした。入院中の私にとって、そこは非合法の聖所であり、ときに警察が追求する文書をつめたく透きとおる心でひらくこともあった。三年前のことである。

K・Yの手紙。或る新聞の学芸部に一脚の椅子をもつ男。花言葉をつければ彼は「にがにがしい善意」だ。精神鑑定書なら「ジャアナリズムと詩の相乗作用」と記すべきだ。新聞記事も詩も過ぎゆく時間がうんだ現象にすぎぬと心得ているうちに、信仰を抱きまたうちくだいた。いまは不定形の戦闘心だけが陰影にまぎれて残っている——

飲みかけのコーヒーのようなインクで

——いまやわが国のありとある「詩人」に向って新仮名遣いに対する賛否をはじめ再軍備是非か非かにいたるまでアチーヴメント・テストを行う必要がある。

——日本人に対する百問というのを考えてほしい。

彼がまじめになる時、やや教化趣味があらわれるのはなぜだろう。読み終えてマッチをすっ

た。葉漏れの日のために炎はほとんど色がなかった。

*

私はK・Yの原則に賛成した。けだし詩とは留保なしのイエスカ、しからずんば痛烈なノウでなければならぬ。詩が来らんとする世界の前衛的形象であるかぎり、その証明は詩人の血をもって明らかにせねばならぬ。

詩人とは何か。

まだ決定的な姿をとらず不確定ではあるが、やがて人々の前に巨大な力となってあらわれ、その軌道にひとりびとりを微妙にもとらえ、いつかその人の本質そのものと化してしまふ根源的勢力……花々や枝や葉を規定する最初のそして最後のエネルギー……をその出現に先んじて、その萌芽、その胎児のうちに人々をして知覚せしめ、これに対処すべき心情の発見者、それが詩人だ。

このような人間が保守的な世界に一票を投ずる可能性があると考えことは二重に困難なことである。第一に古くなってしまった力は根源的ではありえない。第二に根源的でないものは創造的ではない。だから進歩的なものに「尾をふる」者は——詩人ではない、ということも成り立つ。

K・Yの形式にしたがえば、私の第一問はこうである。
汝、尾をふらざるか。

*

頬白が一羽あたまをかすめた。

思うに人間の思想は幾度か転向しさえすることがある。何をもってその者最後の思想と呼ぶか。時はなにがしかの魔力で人間からその思想をひきはがし固定する。その時はじめて人は一瞬の己が影に責任をもたねばならなくなる。誰に向って？

おそらく私達が漠然と感じているよりもっと多くの人々であろう。思想は一種のエネルギーである。エネルギーは不滅である。私は日々まわりの愛する者たちに無数のイエスとノウを投げつける。しばしばそれは自分自身へこだます。巨大なノウが響きわたる。私はうちのめされる……

人々は遠くにいるのだ。そして私を動かしているのだ。彼等はそうする権利がある。なぜなら私も彼等を動かすのだから。

彼等——それはいったい何者なのか。口も聞かず手も触れないのに、私の死すら支配している彼等は。

メフィスト……その事を話すのは一体

不可能なのだ。それは「母」達だ。

ファウスト（驚く）母達か。

メフィスト

身の毛が立ちますか。

二十世紀の「母達」はどこに在るのか。寂しい所、歩いたものがない、歩かれぬ道はどこにあるか。現代の基本的テーマが発酵し発芽する暗く温かい深部はどこであろうか。そこそ詩人の座標の「原点」ではないか。

*

私は立ちあがった。眼の前に遠い何時か火山からほうりだされた岩があった。

汝、彼処にゆきて彼等を見しや。彼等を知れるか。

私は自らに問うてみた。

私の見たもの——それは、馬糧を盗みぐいしながら尿をこらえることができない栄養失調の兵營であつた。鵲鳥の声で叫んでいる盲の原爆症の男だつた。昼の電燈をとぼしながらギタアを弾く未解放部落の青年達であつた。六人で二組の布団をオルグの私に一組貸した金属工であつた。出奔した夫の留守に社宅を追出されなために労務と姦淫した鋳夫の妻であつた。首をきられた私を追いかけてきて十円を与えた掃除婦であつた。握手すればひりひり痛むほど握り返す牛飼の少年であつた。フェルトの草履が一年の労働で買えたと喜ぶ紡績女工であつた。

清水のような笑声をたてる地下生活者、屑拾いをする黨員の妻、葱一本で夕食をすます地区委員、炎の会議、ひややかな弁舌、脱落者の除籍、裏切者の追放、スパイの眼……こんなものを私は見た。もっと多くのものを見た。しかし、もっともっと見るであらうし、見るべきであらう。

では——彼等を知れるか。

知らぬと答えねばなるまい。知るとはそのものを創造しうる、ということだから、私は努めている。

それだけだ。

ファウスト　そこで先ずどうするのか。

メフィスト　下へ降りようとなさい。

力足を踏んで段々降りてゆくのです。

*

「段々降りてゆく」よりほかないのだ。飛躍は主観的には生れない。下部へ、下部へ、根へ、根へ、花咲かぬ処へ、暗黒のみちるところへ、そこに万有の母がある。存在の原点がある。初発のエネルギーがある。メフィストにとってさえそれは「異端の民だ」。そこは「別の地獄」だ。一気にはゆけぬ。

思いみよ、うすら青く貧しい田舎町の営みは遙かな視野も届かぬ森林から、ゆれやまぬ波の底から、細菌のような集落から死者を運ぶ水のように一箇の法則がもたらした憂いと嘆きと怒りの集積であることを。すべての水は通じあい、すべての血管は廻りあい、すべての道は交じりあう。もし一箇の大洋、一箇の心臓、一箇の広場があるならば。

直ちに原点に立とうとあせるべきではない。誰もつねに正確に原点を踏みつづけることは出

来ない。また原点は単なるアイデアではない。原点に向おうとする者はまずおのが座標を、その所属する階級の内容を究め、おのが力の働く方向を定めなければならない。

私達は未来へ向けて書いているのではなく、未来へ進む現在へ向けて書くのだ。偶像を排除せよ！ 観念的労働者主義をうちやぶれ！ 今日の大地の自らの足もとの深部を画け！

汝、足下の大地を画くか。

*

風が急に寒くなり、砂が舞いあがった。遠い原子核分裂の渦——淡い太陽は退いていった。私は谷の岸に立つ——ここに人類が……

いわばひとりの私のように、人類はいまや断崖にのぞみ手にした原子力の鍵をもって、自らの命を断つか新しい太陽を呼ぶかに迷っている。始めか、終りか、それは今世紀のうちに決するのだ。思いがけぬ氷河期が訪れて来た。

もし人類が生き続けることに成功するならば火の使用がそうであったように、私達の言葉もやがて核分裂し、無数の元素を産み、より高い次元の心情とその表現へ進むであろう。もちろん究極的には単一の世界語が。

詩人の任務は古い言葉の火を生きながらえた人類の新しい言葉に点ずるまで「火を消さぬ」こととなった。私達が歌いやめたとき、すべての詩は死ぬのだ、あとつぎもなく古い詩は死のうとしている。一刻の休みもなく私達は新しい子供達を創らねばならない。まだ曉闇以前に横